

リスボン大地震一七五五年―近代ヨーロッパの社会的震撼

永治日出雄

論文二ノ二

ブラガンサ王家の被災と王妃マリアナ・ヴィトリアの書簡

―数奇なる運命を渾身に生きた姫君―

第一節 ベレン離宮の被災と王妃マリアナ・ヴィトリアの証言

ポルトガル絶対王政の本拠、リベイラ王宮とその一帯は大地震・大火・大津波によって壊滅した。しかし、運命の万聖節午前、国王ジョゼ一世と王妃・王女はリスボン近郊のベレン離宮に所在し、僥倖にも危害を免れた。これなるブラガンサ王家の被災については、モレイラ・デ・メンドンサによる簡潔な一文が著名である。

モレイラ・デ・メンドンサ著『世界地震通史―リスボン大地震』

【第四八九項】 国王陛下とご一家はベレンの離宮に滞在され、無事であった。避難された緑地に立派な仮設御所が建造され、そこで数ヶ月生活された。(マヌエル親王だけはネセシダデス宮殿に住んでおられた。) こうして造られた広大なアジュダ宮は、壮大で完璧で木造とは思えないほどである。これら高貴な方々の安否を気遣う人々は、国王ご一家が危機から脱したのを知って、みな喜びに耐えず、リスボン艱苦の当日愛する者や信頼する者とその喜びを分かち合った。①

ベレンはリベイラ王宮の西約六キロ、テージョ沿岸のアジューダ教区に位置し、リスボンの市区としては太平洋への河口にもっとも近く、古来漁業と航海の基地とされた。二十世紀前半の地震学者ペレイラ・ダ・ソーサの推算によれば、リベイラ王宮一帯の激震がメルカリ震度十である一方、アジューダ教区はやや弱くメルカリ震度八とされ、多くの被災者がここへ避難した。マヌエル一世に創建され、歴代の王廟を祀るジェロニモ会ベレン修道院では、壮麗な殿堂が震動に持ち堪えたが、穹窿は墜落し、祭壇の聖像も多数破壊された。教区東端のカルヴァリア修道院では、建物が全壊し、修道女十二名、隠遁者四名、端女六名が死亡したのである。

揺れ動くベレン離宮から辛うじて脱出したポルトガル王妃マリアナ・ヴィトリアは、その三日後地震と避難の様相を綴り、実家のスペイン宮廷へ至急便で発信した。この書簡は震災後もっとも早い時点で送られた国際通信に属するとともに、女性の筆で綴られた稀有な震災証言のひとつである。

ポルトガル王妃マリアナ・ヴィトリア 一七五五年十一月四日付至急便

宛先 スペイン王太后イザベル・ファルネーゼ

親愛なる母君へ

謹啓。この手紙は国王専用の特別便で送ります。不確かな情報を得て、絶望される前に、急ぎ消息を伝えるよう、進言を頂いたからです。

私たちは全員無事で、生きております。神を千回讃美されますように！

土曜の朝九時四五分、私たちは大地の凄絶な揺れを感じました。立居がほとんどできず、辛うじて室外に逃れました。アラビア風の階段を駆け降り、神の加護がなければ、頭か脚を骨折したでしょう。すこしでも前方へと進みながら、怖れおののき、最期のときと感じたことをお察しく下さい。国王は反対側の出口から避難し、すぐに私と一緒にになりました。娘たちは礼拝堂にいて、あとで落ち合うことができました。ああ、神よ！彼女らは居室が破壊されたのに、無傷だったのです。以後私たちはみな広い緑地で野宿しています。

リスボンは完膚なきまでに破壊され、多数の人々が圧死しました。お気の毒にペレラダ（リスボン駐在スペイン大使）もそのひとりです。事態を一層悪化させているのは、火炎が燃え盛り、首都の広大な地域を焼き尽くすのに、だ

① Moreira de Mendonça, *História Universal dos Terremotos*, Lisbon, 1758. pp.119-120.

れも消火のために立ち戻ろうとしません。

(リビエラ) 王宮はなかば倒壊し、残りの部分も内部の設備とともに焼け尽しました。愛する母君よ、多く語れぬ私を、どうかお赦してください。危機と混乱の最中で余裕がないのです。怖るべき災厄ですべて破壊されました。私たちが救われるよう、どうか神にお祈りください。かしこ。

ベレン、一七五五年十一月四日

母君のもっとも従順な娘 マリアナ・ヴィトリア ①

一四九七年ヴァスコ・ダ・ガマは四艘の船隊を率いてベレン港から出航し、インドへの新航路を開拓した。やがて十六世紀には大航海時代を記念して港湾にベレンの塔が建設され、さらに歴代の君主と偉大な航海者を弔うため、壮麗なジェロニモス修道院が造営された。一七二六年専制君主ジョアン五世はアヴェイラス伯爵から河畔の宮殿を買い取り、離宮としての改造を行った。国王一家が地震に襲われたのは、この宮殿においてである。そこには礼拝堂と歌劇場が備わり、大河を望む庭園と馬術の訓練場も付設された。ジョアン五世は一七五〇年に逝去し、その晩年摂政を務めた王妃マリア・アンナ・デ・オステリアも大地震の前年に世を去った。

『ガゼッタ・デ・リスボア』一七五五年七月三日号は、夏季の恒例によってポルトガル宮廷が六月二六日木曜日の夕刻ベレン離宮に移動したことを伝える。以後ジョゼ一世と国王一家はベレンに長期滞在し、六月二七日ペドロ親王の居城、ケルズ宮での花火大会と歌劇上演、十月二日マフラのサント・アントニオ大聖堂における祝祭にはそこから出向した。また、同誌の十月十六日号によれば、ジョゼ一世一家はマフラから恙なくベレン離宮に帰り、同月七日第二王女マリア・アンナの誕生日を祝賀する歌劇上演を王族全員が臨席した。②

アジューダ教区教会神父の記録

永久に忘れえぬ一七五五年国王陛下は、総大司教座における聖体拝領祈禱行進の日から例年のとおりアジューダ教区の離宮に滞在され、夏季を当地で過されたあと、降誕節直前の土曜日にリベイラ王宮へ戻られる予定であった。この間十月末日まで当地で国王ご一家はみな壮健であられ、ウズラ撃ちなどの遊樂を享受された。リスボンの王立歌劇場へ遠出される日もあり、ベレン離宮でイタリア人による喜劇を観劇されることもあった。

こうした安寧を凄絶な地震の突発と衝撃が絶望的な惨状へ暗転させ、神の裁きによつて一挙に死の国に化すかと思われた。すなわち、一七五五年十一月一日このアジューダ教区で勃発した異変について、だれしも天国から地獄への墜落と感じ、天国の居住者が地獄に監禁されたと語る。

一七五五年十一月一日私は万聖節の告解を担当すべく朝早く起床し、午前六時に教会へ着いて、準備を整えた。やがて告解室に女性の信者を招き、聴聞を開始する。まさに午前九時半すこし過ぎ(九時四五分と言う人もある)、告解室の床と天井が揺れ始め、足下に震動を感じた。何事かと相手に呟いたが、身震いして応えない。この間に動きがしばらく止まったように思う。ついで第二の震動が始まり、大地の激動で、家屋が倒壊する響きが聞えた。即座に

① Madrid Archivo Historico Nacional, Estado, leg 2512, doc:25.

Rainha D. Mariana Vitória, Carta a sua mae, a rainha Isabel de Espanha, 4 de Novembro de 1755. in Caetano Beirão, Descrição Inédita do Terramoto de 1755 como o viu e viveu a Rainha D. Maria Vitoria, *Artes & Coleções* 1, no.1 (June 1947).

Nun Gonçalo Monteiro, *D. José, nas sombras de Pombal*, Lisboa, 2008. pp.105-106.

② *Gazeta de Lisboa*, Num.27. Quinta feira 3. de Julho de 1755. p.131. Num 41, Quinta feira 9. de Outubro de 1755, p.328. e Num 42, Quinta feira 16. de Outubro de 1755. p.325.

私は起立して、礼拝堂と告解室の外に出るよう信者に指示した。①

王妃マリアナ・ヴィトリアが大地震の急報を宛てた実母、スペイン王太后イザベル・ファルネーゼは不世出のカストラート歌手ファリネリのパトロンとして知られる。一七三〇年ファルネーゼの配慮によりファリネリを招請し、重病の心疾を音楽療法で癒されたフィリッペ五世は一七四七年に逝去し、マリアナ・ヴィトリアの異母兄が、フェルデinand六世として即位していた。被災の状況がまず王太后宛てに綴られたのは、もともと親密な肉親であるとともに、ポルトガルへの婚嫁以降たえず母子の交信を続けたからである。

震災直後に書かれた多くの書簡が、通信網の混乱によって紛失するなかで、マリアナ・ヴィトリアの至急便は、ポルトガル駐在大使ペレラダの客死を知らせるスペイン大使館の急報などとともに十一月八日マドリッドに到着した。これらの文書はエスコウリアル宮においてフェルディナンド六世夫妻、政府要人、各国大使の列席のもとにただちに会読され、スペイン王権はポルトガルへの物資支援と使節派遣を遅滞なく決定した。広汎な史料探索によってリスボン大地震の全貌を精細に究明するマーク・モレスキーは、近著『リスボンの壊滅、大火の渦動 ― 理性と科学の時代における黙示録』でエスコリアル宮への第一報について健筆を発揮する。

十一月四日の朝、郵便箱を携えたひとりの飛脚が、いまだ燃え続けるリスボンから脱出した。乗馬した彼がまず東に向つて、アレンテージョ州とスペイン領エクストレマドウラの峻厳な丘陵や暗緑の渓谷を越え、ついで吹きすさぶカステリアの荒野を進むのに数日を要した。騎馬を得られぬ道程では長距離を歩き、十一月四日午後四時憔悴し、砂塵に塗れてマドリッドに辿り着いた。〔中略〕

「国王フェルディナンド六世は」とスペイン駐在英国大使ベンジャミン・キーンは伝える。「ポルトガル王家がかくも凄惨な災厄に襲われたことに心痛された。ただちに異母妹であるポルトガル王妃に陛下はすぐさま返書を書かれ、深い恵愛と慰藉の言葉を贈られた。また、被災地から遠く離れ、ただちに支援できぬ焦慮をも表明された。さらに国王は、ポルトガル王家が深甚な危難を免れたことを、限りなく神に感謝すると、王太后イザベル・ファルネーゼに申された。」

書簡到着の数時間後、フェルディナンド六世と王妃マリア・バルバラは、ベレン支援の積荷を完了させ、新聞の報道によれば、必要なあらゆる物資をポルトガル宮廷に届けるよう指令した。「スペイン王権は援助と救済に全力を挙げ、」とポルトガル駐在英国大使の公文書に綴られる。「資金を届ける使者を連日派遣した。また、陛下は異母妹マリアナ・ヴィトリアへの返書で、ポルトガル国王が必要とし、スペイン国王が提供できる一切を急送すると誓われた。ペソ銀貨十五万すなわち三万七千ポンドに相当する物資と貨幣の譲渡を円滑にすべく、フェルディナンド六世は国境におけるすべての関税徴収を中止させた。」

かくして世界史上被災地へ向けて最初の国際的救援が発動した。イベリア半島においてスペインとポルトガルが数世紀にわたり抗争を繰り返すなかで、両王家の血縁関係がこれを可能としたのである。疑いもなくここでの推進力はポルトガル生れのスペイン王妃、マリア・バルバラであつて、容姿に恵まれぬ多才なフェルディナンド六世は熱愛し、つねにその意向に従つた。

モレスキー著『大火の渦動 リスボン壊滅―理性と科学の時代における黙示録』(ニューヨーク、二〇一五年) ②

① *Dos Direitos desta Parochial Igreja de Nosso Senhora da Ajuda.* in Sousa, op.cit., tomo III, p.694.

② Mark Molesky, *This Gulf of Fire, the Destruction of Lisbon or Apocalypse in the Age of Science and Reason.* New York, 2015. pp.225-226.

大地震の三日後に綴られた王妃マリアナ・ヴットリアの至急便は、十一月八日実家のスペイン宮廷に到着し、国王夫妻、政府要人、各国大使列席のもとに会読された。彼女の異母兄たるフェルディナンド六世とジョゼ一世の実妹である王妃バルバラは、ただちにポルトガルへ向けて物資の支援と使節の派遣を指令し、強力な援助を展開すべく国境における関税徴収を廃止させる。世界史における国際的な災害救援第一号は、まさしく両国王妃の主導によって実現された。

第二節 数奇なる運命を渾身に生きた姫君

―王妃マリアナ・ヴィトリアの前半生―

浩瀚な『回想録』によつて太陽王の世紀を後世に伝えるサン・シモン公爵ルイ・ド・ルヴロワは、一七二一年十二月フランス王権の特命大使としてスペインへ越境した。ルイ十四世の御代に不遇に甘んじたこの帯剣貴族は、太陽王の没後摂政オルレアン公フィリップ二世の側近となり、領土争奪をめぐる四国同盟戦争で交戦したスペインに対して、同盟を復活すべく尽力していた。特命大使としての任務はヴェルサイユとスペイン宮廷を結ぶ二重の縁談、すなわちスペイン王太子ルイ・フェリッペ、のちの国王ルイ一世と摂政オルレアン公の第五公女ルイザ・イザベル・ドルレアンとの結婚、さらには六年前に即位した十一歳のフランス国王ルイ十五世とスペイン王家三歳の王女マリアナ・ヴィトリアの婚約について、正式の誓約を行うことである。二つの王権を結ぶこうした政略結婚は、姫君の交換婚姻と呼ばれ、絶対主義の時代にしばしば行われた。これらの縁組はつとに同年七月頃からオルレアン公を中心に協議され、サン・シモンはそれを補佐したのである。マドリッド王宮におけるフィリップ五世夫妻への拝謁と幼児マリアナ・ヴィトリアの様子を、『回想録』第十九卷第三章に記録される。

余らが王宮を訪れたとき、国王はミサへの臨席を終えるところで、貴顕広間と鏡の広間に挟まれた控室に案内され、そこで待機するよう指示された。まもなく国王が貴顕広間を通り、小広間へお越しに、とグリマルドが告げる。ヴェルサイユとは異なつて小人数の廷臣を従え、国王がそこに来られた。余が懇勲に挨拶すると、国王は歓迎の意を表され、フランス国王とオルレアン公の近況を尋ね、さらにはマドリッドへ至る余の旅路やブルゴスで病む余の長男について下問された。そのあと国王は化粧室へしばらく退去された。他方余の周りには宮廷のさまざまな人物が集まり、フランスとスペイン両王権の縁組と連帯に向けて祝辞や歓声が寄せられた。グリマルドとリリエラ公爵は余を高位高官に紹介し、彼らの大半がフランス語で鄭重に挨拶するので、これに応えるよう努力した。

七分ほど過ぎて国王が戻られ、余に呼出しがなされた。単独で鏡の広間に入ると、広間で奥行きが深い。広間の深奥に国王陛下とその左脇の王妃が起立しておられた。余は鄭重な挨拶を三度捧げ、国王の盛装はこれなる謁見のためよりも、むしろ直前に終了したミサ臨席のためとすぐに察した。謁見は通例のとおり半時間に限られ、両陛下が婚儀への喜悦と希望を表明された。また、オルレアンへの切実な懇請を託されるとともに、モンパンシエ嬢とフランス国王の肖像を示しつつ、彼女を幸せにしたいと語られた。王妃がより多弁であったが、おふたりの表情には歡喜が満ち溢れ、こうした応答の末尾に王子と王女に会わせましよう、と、光栄にも余を案内された。単独でお供して進むと、王妃の居室と化粧室があり、中央の廊下には女官ふたりと侍従数名が控え、あらかじめ用意したらしい。狭い控室の先が王子たちの居室であった。そこで出会った(第二王子)フェルディナンドと(第三)王子カルロスほど美しく逞しい子どもを見たことがなく、同じく(第四王子)フィリップ王子ほど可愛い幼児を知らない。嬉しそうに国王と王妃はこれらの王子を私に眺めさせ、眼の前で凜然と立たせたり、歩かせたりした。ついで王女の居室に移るので、余はできるだけ愛想よく、と緊張する。披露された王女は聡明にして魅力的であり、戸惑うような面持を見せた。娘はフランス語をすっかり学び始めました、と王妃が語る。やがてスペイン語は忘れるであろう、とは国王の言。さらに王妃が言い添える。スペイン語だけでなく、父親や私をも忘れ、夫君であるフランス国王をひたすら愛するでしょうよ！これには余も応答の言葉に窮した。王子・王女の居室を出て、さきの控室を通りながら、両陛下は歓迎の言葉を繰り返された。ふたたび広間に戻り、大勢の貴顕から厚誼を受けたのである。殿下は真の美丈夫と申すべく、麗しき金髪、色白の笑顔、細い眉間と美しい眼が印象的であり、温雅にして鄭重なお人柄と感じた。フランス国

王とオルレアン公の近況、さらにはモンパンシエ嬢の様子とスペイン到着の予定について王太子は熱心に質問された。

サン・シモン公爵著『回想録』第十九卷 ①

フランス王室へ嫁ぐマリアナ・ヴィトリアは、一七二二年三月二日パリに到着し、出迎えのルイ十五世やオルレアン公に伴われ、サン・ジャック門からノートル・ダム橋、サン・トノレ街、ルーブル宮へと行進した。このときパリで全市を挙げて君主の婚約を慶賀し、夜半から翌日まで祝祭が続いた。幼少の婚約者は未成年の国王とともにルーブル宮に住み、数々の王侯を育てたヴァンタドール夫人の養育を受ける。宮廷でも参賀、展示、歌劇、舞踏、花火など記念行事が続き、同月十二日にはノートル・ダム大聖堂で謝恩式が挙行された。その三カ月後ルイ十五世は王政の本拠ヴェルサイユに居城を移し、それに伴ってマリアナ・ヴィトリアもパリを離れる。他方摂政オルレアン公の公女ルイザ・イザベル・ドルレアンは、同年一月にスペイン王太子ルイ・フェリッペとの挙式を済ませ、マドリッド宮廷に十歳で輿入れした。さらにフィリップ五世の発議により第三王子カルロス、のちのカルロス三世とオルレアン公の公女フィリピーヌ・イザベル・ドルレアンとの婚約が成立し、一七二三年一月六歳の公女がマドリッドへ到着した。こうしてスペインとフランスの両王家は、三重の併行婚姻で連帯を固める。②

ポルトガルの文筆家カエタオ・ベイラオは一九三六年長文の序文を添えて『王妃マリアナ・ヴィトリア書簡集』第一巻を編纂した。第一巻に収録される手紙は、ルイ十五世と婚約する一七二二年から実父フィリップ五世が逝去する一七四七年まで、スペイン王室宛に綴られた二五八通に及ぶ。ここではパリ到着の直後異母兄ルイ・フェリッペに宛てた書簡とヴェルサイユにおける成育の日々を語るスペイン国王夫妻への書簡を訳出する。

マリアナ・ヴィトリア 書簡第七

宛先スペイン王太子ルイ・フェリッペ

一七二二年三月一日 パリ

けいあいする兄君さま

幸いにもぶじパリに着きました。そうれいな歓迎を受けました。お元気とお便りに加え、私へのごしゅうぎを頂き、身にあまる幸せです。匂いふくろの香りにうっとりとし、人形をいつも手元に置いています。ここでのごうかななダンスやうるわしいちようどお見せしたいほどです。王太子妃が体調をかいふくされたと知り、たいへんに喜んでいきます。カルロス王子にもしんあいの情よろしくお伝えください。私もさいりようの体調であります。兄君のごそうけんを祈り、いつまでも愛してくださいさるようお願いします。 かしこ。③

マリアナ・ヴィトリア 書簡第十三

宛先 スペイン国王フィリップ五世および同王妃イザベル・ファルネーゼ

一七二二年七月二六日 ヴェルサイユ

けいあいする父君さま

いつもお便りを待ちかねています。父君がお元気であることを知ることほど、大きな喜びはありません。こちらでは体調よく、いろいろな楽しみをけいけんしています。オルレアン公の奥様（オルレアン公爵夫人）からすてきな人形を頂いた、とまずお知らせします。この人形は美しいけいしょう台のかざりでもあります。（ブルボン家）王女のか

① Duc de Saint-Simon, *Mémoires sur le Siècle de Louis XIV et la Régence*. par Emile de la Bédollière. Paris, 1865. tome 19, pp.34-37.

② Paul Drumond Braga. *Mariana Vitoria de Bourbon, a Rainha discreta*, Lisboa, 2018. pp.33-35, 37.

③ *Ibid.*, pp.6-7.

たがたにも親切にされています。国王陛下（ルイ十四世）も私を喜ばせるよういろいろさしずされ、ヴァンタドゥールの奥様（ヴァンタドゥール公爵夫人）はいつも私をかわいがり、身のまわりのすべてを世話されます。父君に変わりなく愛され、私からのあいほがいつまでもとどくことを祈ります。

けいあいする母君さま

母君がすこやかでおられ、たえず私を愛されることを知れば、ここでの幸せに欠けるものはありません。いつもつぎのように心がけています。いつもしんみにされるヴァンタドゥール様のごいこうを大切にしながら、母君の教えを忘れず、いちずに守つていこう、と。ダンスのしどうもを受けはじめました。ほかのむずかしい勉強をおろそかにせず、じょうずに踊れるようけいこします。じょうたつしたら、またお知らせします。 かしこ。 ①

マリアナ・ヴィトリアがヴェルサイユで熱烈に迎えられた二年後、フランスとスペインの両宮廷はいずれも予期せぬ激変に揺れる。フランス宮廷ではスペインとの連帯を推進する摂政オルレアン公が、一七二三年暮に国務一七二四年多忙のさなか急死し、政敵であるブルボン公がその後任に推挙された。スペインではフィリップ五世の退位によりとして玉座に就いた十七歳のルイ一世が、在位わずか八カ月で逝去する。この年十五歳の成人に達したルイ十五世も病弱であるため、相次ぐ王族の夭折に戦慄したフランス宮廷は、いまだ六歳のマリアナ・ヴィトリアを擁しつつ、世継ぎの早急な誕生を切望する。こうしてブルボン公を中心に国王の婚約解消とすぐにも出産可能な王妃候補について密議が始まった。

一七二五年三月にスペイン駐在フランス大使フランソワ・ド・リヴリは、婚約解消を要望するルイ十五世の親書を携え、マドリッド宮廷に参内した。ルイ一世の急死によって君主に復位したフィリップ五世と王妃イザベル・ファルネーゼは、ヴェルサイユの身勝手な破談に激怒し、親書の受理を拒否する。まもなく報復として国王夫妻は第三王子カルロスとフィリピーヌ・イザベル・ドルレアンとの婚約を解消させ、寡婦となった前王妃ルイザ・イザベル・ドルレアンにも国外への退去を命じた。② 婚約解消についてはポウロ・ドルモンド・ブラガによる最新の評伝『ブルボン王家マリアナ・ヴィトリアー思慮深き王妃の生涯』から幼時における婚約解消の記述を引用する。

かくしてマリアナ・ヴィトリアは一七二五年四月五日ヴェルサイユから永遠に去った。ルイ十五世は離宮マルリへ数日遠出して不在であった。彼女自身には一時的な里帰りと言き、出立の真の理由は隠された。両親に再会して跳躍や舞踊を見せることを、旅路では楽しみにしたのである。

フランスにおける三年間に王女が得た宝石類は、すべて携えるのを許された。スペインまでタラール公爵夫人とジュラフ公爵が案内し、国王軍の将校が護衛する。養育に献身したヴァンタドール夫人は、高齢のため愛し子に同伴できず、悲しみの手紙をフィリップ五世とイザベル・ファルネーゼに宛てて綴った。

D・ブラガ著『ブルボン王家マリアナ・ヴィトリアー思慮深き王妃の生涯』（リスボン、二〇一八年） ③

マリアナ・ヴィトリアの一行はシャルトル、ポアチエ、ボルドーを経て国境を越え、一七二五年五月一七日ナバラ地方ブルゲテに到着し、ブルボン王家の第二王子、実兄カルロスの出迎えを受けた。ついに同月三十日彼女はマドリッド王宮に帰着し、王室全員が参集して天恵感謝の祭事が営まれた。さらに翌月三十日にマドリッドでは王女の無

① *Ibid.*, p.14.

② William Coxe, *Memoirs of the Kings of Spain of the House of Bourbon from the accession of Philip V. to the Death of Charles II.* London, 1815. vol. III, pp.111-112.

③ Braga, *op.cit.*, pp.41-42.

事帰還を祝賀して盛大な闘牛祭が挙行された。① この間にヴェルサイユではポーランド廃王の次女、二二歳のマリ
ー・レクザンスカとルイ十五世の婚約を発表し、一七二五年九月五日婚礼の盛儀が行われた。健康に恵まれた彼女は、結婚第三年に王女の双生児を、また結婚第五年には王太子ルイ・フェルディナンド、すなわちルイ十六世の父
を出産する。その反面スペイン宮廷から追放されたルイザ・イザベル・ドルレアンとフィリピーヌ・イザベル・ドル
レアンはフランスに戻って、前者はヴァンセンヌ城で孤独な晩年を送り、後者は天然痘のため十九歳で逝去した。②
こうして多くの姫君が施政者の権謀術数に翻弄され、交換婚姻によつてときには不幸な境涯に沈むなかで、なおも
多難な人生行路をマリアナ・ヴィトリアは懸命に生き続ける。

ルイ十五世との婚約解消をヴェルサイユから通告された一七二五年三月下旬、スペイン宮廷ではポルトガル王家
と一対の縁談を進め始めた。フィリッペ五世と亡き王妃マリア・ルイーザの次男、新たな王太子フェルディナンドの
伴侶としてポルトガル国王ジョアン五世の長女、マリア・バルバラ王女を迎え、併せて十一歳のポルトガル王太子
にマリアナ・ヴィトリアを嫁がせる構想である。この構想はマドリッド宮廷から提案され、ヨーロッパ列強からの防
衛に腐心するポルトガルがスペインとの連帯強化を快諾した。やがて一七二七年三月マドリッドでマリアナ・ヴィト
リアとスペイン王太子の婚約が、また同年十月にはリスボンでは王太子フェルディナンドとマリア・バルバラ王女の婚
約が誓約された。かくして両国を結ぶ一対の婚儀のため国境に位置するポルトガル領カイヤ郷とスペイン領バダジョ
が選定される。一七二九年一月七日王太子フェルディナンドと王女マリアナ・ヴィトリアを補佐し、ブルボン王家、
高位高官、インド総大司教、さらには廷臣や衛兵の総数一万五千名がマドリッドを出発した。他方ポルトガルでは
宮廷の要人であるラファエス侯爵やアレグレテ侯爵、さらには祭儀を司るリスボン総大司教等など約二千名が先発
し、ジョアン五世と王太子ジョゼは同月八日、王妃マリアナ・デ・オステリアと王女マリア・バルバラは九日リスボ
ンを出立し、アレンテージョ州のエヴォラやエルヴァスを経て、四日後に宿泊地のヴィラ・ヴィソサ郷に到着した。③

ポルトガル王太子ジョゼとスペイン公女マリアナ・ヴィトリアの結婚式は、一七二九年一月十九日両国の国境カイ
ア河に浮かぶ小島で挙行された。木造りの式場にはふたつの入口が配され、広間の大机はタピスリで飾られる。左
右の入口からフィリッペ五世とジョアン五世が随員を従えて同時に入場し、挨拶を交わしたあと、婚姻の誓約書を閲
読し、それぞれ署名をした。そのあと音楽が奏されて相互に慶辞を述べ、姫君の交換が成就したのである。ここに両
国の王族が加わり、歓談と舞踏が始まる。ポルトガルに嫁ぐ十一歳のマリアナ・ヴィトリアとスペインに嫁ぐ十八才
マリア・バルバラは、涙ながらに家族との別れを惜しむ。その夜エルヴァス大聖堂においてリスボン総大司教が、スベ
イン王家との交換婚姻を祝福し、謝恩式を主宰した。帰途についたブラガンサ王家は各地で祝賀を受けつつ、広大
なアレンテージョ州を横断する。二月十三日テージョ得河畔の対岸アルディア・ガレダで陸路から水路に移り、随
行団を分乗させた千余艘の船舶に護られて、ダ・パルハ湾よりリスボンに入港した。花嫁マリアナ・ヴィトリアを歓
迎するリスボンの祝祭については、フィリッペ五世の近臣としてマリアナ・ヴィトリアに随行したシャルル・モンタゴン
の報告を訳出する。④

国王・王妃両陛下をはじめ王室ご一同は、まずマードレ・デウス教会の河港に上陸され、礼拝堂で祈祷を捧げら
れた。そこで聖儀を終えたのち、再度乗船してリスボン沿岸を周航され、河港では無数の停泊船が、挙つて祝賀の旗
幟を掲げる。やがていわゆる水辺宮殿、ベレン離宮の船着き場に到り、ジョアン五世が近年取得された堂宇で昼食を
摂られた。午後両陛下に導かれて王太子ご夫妻はアルカントラ門よりリスボン市内を行進される。沿道には人波が

① *Ibid.*, pp.42-43.

② *Ibid.*, pp.40-43.

③ *Ibid.*, pp.45-46, 53-54.

④ *Ibid.*, pp.58-59.

満ち溢れ、両側には祝賀アーチ二十が建ち並ぶ。行進の宮廷馬車百余輛を各各六頭の騎馬が曳くのである。壮麗な盛儀に飾られてご一同は王宮礼拝堂、すなわち総大司教教会へと進み、謝恩式に臨席して、総大司教の主宰によって讚美歌で天恵を祈られた。(中略)

王太子妃の輿入れを祝して、首都の全市街と全船舶が燈明を続けた。円形劇場をなすリスボンの地勢は、数々の丘陵で起伏し、ベレンの塔へと伸びて、絶妙の壮観を現出した。

モンタゴン著『カイヤよりリベイラ王宮へ』(一七二九年) ①

やがて王太子妃マリアナ・ヴィトリアは、女性としての成熟に達し、一七三四年第一王女マリアを出産し、一七三六年に第二王女マリアナ・フランシスカ・ジョゼハを出産する。さらに第三王女マリア・フランシスカ・ドロテイアが一七三九年に、また第四王女マリアナ・フランシスカ・ベネディタが一七四六年に誕生した。専制君主ジョアン五世の逝去によって、一七五〇年王太子ジョゼがジョゼ一世として即位し、その五年後ポルトガルは大地震に襲われたわけである。マリアナ・ヴィトリアの多難な生涯において、カイヤ郷での婚儀から大地震直前までは比較的平穏で幸福な二五年間であった。

ポルトガル宮廷に入ったマリアナ・ヴィトリアは、十五歳の王太子ジョゼに愛されるとともに、可憐な容姿と淳良な天性がジョアン五世夫妻の御意にも叶った。また、義弟である第二王子ペドロは、異国へ来た彼女に優しい心遣いを示し、親密な間柄となった。第三王子カルロスは多病であつて、一七三六年に夭折した。婚礼の時点から数年間マリアナ・ヴィトリアはほぼ週三回の頻度でスペイン宮廷へ消息を綴るが、ここではまずブラバンサ王家での日常を伝える書簡四通を紹介する。これらの史料によって、若き王太子妃の勉励と鍛錬がいかなるものかを察しうると同時に、教会での盛儀や宗教的な祝祭に臨席することが、王妃や王女のいわば公務であつたことを確認できる。

マリアナ・ヴィトリア 書簡第二〇

宛先 スペイン国王フィリップ五世および同王妃イザベル・ファルネーゼ

一七二九年四月二九日、リスボン

敬愛する父君さまと母君さまへ

一昨日美しい農場ベラスに出掛け、乗馬をしました。乗つたのはとても愛らしく、従順な馬で、国王様と王妃さまが私のためとくに選ばれたものです。そこで夕食を済ませ、農場をゆっくり散歩して、宮殿へ帰りました。火曜日は主の慈愛を讃える謝恩式がありました。小鳥と子犬をお届け頂き、有難うございました。王太子と第二王子によりしくお伝えくださあい。かしこ。

マリアナ・ヴィトリア 書簡第四一

宛先 スペイン国王フィリップ五世および同王妃イザベル・ファルネーゼ

一七二九年八月二三日、リスボン

敬愛する父君さまと母君さまへ

昨夕お手紙を受け取り、神護によりお元気の由、嬉しく存じました。私も元気でおります。美しい時計をお贈り頂き、有難うございました。時計も鎖も美しい、と王太子さまも眺められました。今日からラテン語を学び始め、明日は動詞の学習に入ります。すべて易々とできるので、先生も大変満足されています。スペイン王太子ご夫妻と私の兄弟によりしくお伝えください。かしこ。

① Charles Alexandre de Monignon, Do Caia ao da Paco da Ribeira, in José Brandão, *Este é o Rein de Portugal*,

マリアナ・ヴィトリア 書簡第五四

宛先 スペイン国王フィリップ五世および同王妃イザベル・ファルネーゼ

一七三〇年四月二〇日、リスボン

敬愛する父君さまと母君さまへ

お元気のことと拝察します。こちらでも元気です。昨日乗馬して王太子とともにベレン離宮へ行きました。数日前にも王太子とペドロ王子にお供してカンポ・ペキノまで乗馬し、そのあと王妃陛下とカルロス王子が宮廷馬車でそこへ来られました。帰りにはネセシダス教会へ寄りました。土曜日と月曜日にはサン・フランシア・デ・ポウラ教会へを訪問しましたが、聖母マリア七つの苦しみ記念日にあたり、セレナーデはお休みでした。かしこ。

マリアナ・ヴィトリア 書簡第七十

宛先 スペイン国王フィリップ五世および同王妃イザベル・ファルネーゼ

一七三二年二月十日、リスボン

敬愛する父君さまと母君さまへ

父君さまと母君さまにおかれてはともにご壮健の由、昨日の王宮専用便で知りました。私も元気しております。悪天候のため数日外出を控えていました。昨日は聖ドミンゴスのキリスト受難祈祷行進に参加するつもりでした。今日はネセシダス教会の礼拝を予定しています。明日は（オラトリオ会）聖霊教会修道院へ行き、そのあとカルロス王子をお見舞します。神護を得られ、王子様はかなり回復されました。父君さまのご安寧を祈るとともに、私の兄弟姉妹によろしくお伝えください。かしこ。①

三歳でフランス語を、十一歳でラテン語を学び始めたマリアナ・ヴィトリアは、ポルトガル語についても嫁ぎ先であるジョアン五世の宮廷で駆使できるよう勉強した。イタリア語は実母イザベル・ファルネーゼの母国語であって幼時から聞き慣れ、のちにはとくに声楽の歌詞や歌劇の台詞を把握できるよう学んだとされる。やがてリスボン宮廷で外国使節への謁見や接待の中軸となる彼女は、これら多数の言語で流暢に会話し、英国大使等とはフランス語で話した。マリアナ・ヴィトリアが数カ国語に通じた読書家であったことも、種々の史料に記録される。ヴェルサイユにおける恩師ヴァンタール夫人への書簡で一七三〇年三月彼女は、『ローマの歴史』など立派な歴史書五冊をお送り頂いた」ことを感謝した。また、その翌年十二月スペイン宮廷に宛てた書簡では、『モレリ編纂『聖俗歴史等大辞典』のスペイン語版入手』を依頼する。王宮には王太子妃のためふたつの書庫が設けられ、震災時の仮設御所でも告解の間に書棚が配され、それらには画集、地誌、歴史書、宗教書などが納められた。pp.278-279.

数々の外国語を学び、読書を好む彼女は、戸外の活動において闊達な乙女でもあった。ジョアン五世は独裁的な統治を堅持すべく、自己の近縁を政権から遠ざけていたが、生来王太子ジョゼは政務よりも風雅と遊樂を愛した。王太子をはじめ、ブラガンサ王家の親王や王子と行動をともし、マリアナ・ヴィトリアが打ち込むのは乗馬や釣魚、さらには狩猟や射撃である。狩猟は王侯貴族の代表的な遊樂であり、スペイン宮廷でも愛好された。結婚後まもなく王太子妃は宮廷は馬術師範に指導を仰ぎ、ついには乗馬の名手とまで讃えられる。船遊びや釣りはベレン離宮も河岸で、乗馬は首都近郊のカンポ・ペキノで、また狩猟はベレン離宮や 離宮を拠点に山野で行なわれた。これらは出産や服喪の時期を除き、生涯にわたり続けられた。彼女の書簡集から関連箇所を若干を抜粋する。

マリアナ・ヴィトリア 書簡第八三

① Caetano Beirão, *op.cit.*, tomo I, pp.45, 56, 65-66, 79.

宛先 スペイン国王フィリップ五世および同王妃イザベル・ファルネーゼ

一七三二年十二月十三日 リスボン

敬愛する父君さまと母君さまへ

・・・モレリ編纂の『歴史大事典』を参照したく、またニューキャッスル公爵による仏文の著書一冊と英文の著書一冊を求めています。入手可能であれば、ぜひご送付くださるよう、母君さまにお願い致します。・・・

マリアナ・ヴィトリア 書簡第八五

宛先 スペイン国王フィリップ五世および同王妃イザベル・ファルネーゼ

一七三三年二月十七日 リスボン

敬愛する父君さまと母君さまへ

・・・こちらではとくに変わったことはありません。先日マフラの自然園タパーダへ行き、猪三頭、牝鹿三頭、兎多数を撃ちました。昨日の朝は王太子さまとペドロ王子さまが、鶉狩をされました。明日はセレナーデが催されま
す。・・・

マリアナ・ヴィトリア 書簡第一四一

宛先 スペイン王妃イザベル・ファルネーゼ

一七三五年四月一九日 リスボン

敬愛する母君さまへ

・・・神護により私も娘も元気でおります。好天が続ぎ、麗しい緑地で昨日私たちは素敵なお散歩をしました。乗馬でも散策も頻繁で、私にとって大きな楽しみです。・・・

マリアナ・ヴィトリア 書簡第二〇九

宛先 スペイン王妃イザベル・ファルネーゼ

一七四三年五月八日 カルダス

敬愛する母君さまへ

・・・土曜日に私たちはリスボンを出立し、十二時半ヴィルネーヴに着きました。そこで泊まる予定でしたが、王妃陛下のご意向で先に進み、かねて私が望んだとおり、宵の十時半に一路カルダスに着きました。当地では国王陛下がすでに就寝され、翌朝に拝顔致しました。つとに陛下は木曜日にリスボンを出発され、同日午後三時二五分にごへ到着されたのです。土曜日に温泉を浴され、療法に従ってその後二度入浴されました。お会いしたときは、大層お元気に映じました。私たちの滞在は僅か数日の予定で、私にはそれが好都合でした。

昨日カルダスから一ルグラスほど海岸を乗馬で散策しました。私自身が釣竿を持ち、沢山の魚を釣り上げて大満
悦です。その釣場は海ではなく、海から内陸へ入り込む湖で、満潮のときは水門を開けます。美しい景色のよき釣場
と以前から聴き、幸運にもそれをこの日体験できました。・・・①

こうした訓練や遊樂のなかで彼女はもつとも情熱を傾けたのは、音楽の領域である。膨大な書簡集には器樂、歌
唱、舞踊に取り組む自身の勉学はもとより、宮廷におけるセレナーデやオペラの記録が頻出する。ここではまず一
七三四年カルロス王子の逝去によって、服喪として遊樂が禁止されたとき、音楽への情熱を吐露した記述を訳出する。

① Ibid., pp.91-92, 93, 137, 207-208.

マリアナ・ヴィトリア 書簡第一五〇

宛先 スペイン王妃イザベル・ファルネーゼ

一七三六年四月三日 リスボン

敬愛する母君さまへ

・・・悲しくもカルロス王子さまが永眠されました。殿下は大変温雅なお方で、この世の艱苦を免れるよう、早めにめに天に召されたと信じます。これを哀悼して宮廷では六カ月服喪と定められました。音楽の指導を受けるのが唯一の楽しみであるのに、すくなくとも一カ月か二カ月これを受けられぬのです・・・

マリアナ・ヴィトリア 書簡第一五二

宛先 スペイン王妃イザベル・ファルネーゼ

一七三六年五月一日 リスボン

敬愛する母君さまへ

・・・カルロス王子さまが亡くなって、昨日で一カ月になりました。過度の服喪に耐えきれず、ようやく明日音楽の指導が再開されるのを待ちかねています・・・

マリアナ・ヴィトリア 書簡第一六四

宛先 スペイン王妃イザベル・ファルネーゼ

一七三七年六月一九日 リスボン

敬愛する母君さまへ

父君さまと母君さまにはお元気の由、お手紙を拝見し、嬉しく存じます。ふたりの娘とともに私も神護により変りなく過しております。自分の憂鬱を晴らすよう極力努めています。なんの楽しみもない国では気晴らしも難しいことを、どうか察してください。ひたすら音楽を愛する私には、歌うことが唯一の楽しみなのです。いまでも頻繁に外出しますが、行先は教会ばかりです。いま一度懐しきベレン離宮に行けたら、随分気が晴れるのですが・・・①

この間にスペイン宮廷では一七三三年頃からフィリップ五世の精神疾患が次第に悪化し、国王としての執務が困難となり、日常生活でも異常な行動を重ねるようになった。万策に窮したスペイン王妃イザベル・ファルネーゼは、一七三七年高名なカストラート歌手ファリネリをマドリッドに招聘し、晴朗な歌声を聴かせることによって、国王の難病を解放に導いた。実父の深刻な容態がマリアナ・ヴィトリアには伏せられていたが、エストリア宮におけるファリネリの奇蹟、いわば音楽療法の嚆矢はただちにポルトガル宮廷へ伝えられ、稀なる心疾回復に彼女は歓喜した。

マリアナ・ヴィトリア書簡第一六七

宛先 スペイン王妃イザベル・ファルネーゼ

一七三七年八月二〇日 リスボン

敬愛する母君さまへ

・・・現存する最高の歌手（ファリネリ）がマドリッドへ招かれたとの噂です。評判のとおり素晴らしい歌手かどうか、そちらでの様子をお知らせください・・・

① *Ibid.*, pp.130-140, 141-142, 156-157.

敬愛する母君さまへ

父君の添書を付したお手紙を頂き、尽きせぬ歓喜を感じております。また、私たちへの貴重な配慮を感謝し、今後のご多幸をお祈りします。……

ファリネリの歌唱を聴かれ、快方に向かわれたとの由、大いに安堵しました。遍く世に知られるとおり、彼を凌駕する歌手は存在せず、そのアリアは絶妙とされます。(そうしたアリアをほかの歌手も唱し、私も歌います。)昨日王妃陛下が私に申されました。「スペイン宮廷へ嫁いだ」王女(マリア・バルバラ)の便りによれば、ファリネリはこれが頂点である。」けれども、クラブサンの性能と同じく彼はたえず向上するとの評価を耳にしております。ファリネリを聴ける僥倖に浴したいのですが、天恵を辛抱強く待つほかありません。

そちらでも豊かな狩獵をされるよう祈ります。今年はウズラが群れをなし、幾度か狩獵を楽しみ、宵闇に帰ることもありました。とくに新しい出来事はありません。末尾ながら、父君と母君の至福をわが幼な子とともに再度祈ります。

かしこ。①

マリアナ・ヴィトリアの書簡集は近況の報告を主たる目的として、自己の錬磨や遊樂について多くを語るが、大地震に先立つて僅少なながら災害の記録を含むことが注目される。ポルトガルへ嫁いで三年後、リスボン一帯が暴風雨に襲われ、水運に多大の被害が生じた。まずはスペイン王宮に宛てた一七三二年の書簡を訳出する。この時期彼女の実父、フィリップ五世の心疾が深刻な病状に陥ったが、マリアナ・ヴィトリアには実情が秘せられていた。

マリアナ・ヴィトリア書簡第一〇四

宛先 スペイン国王フィリップ五世および同王妃イザベル・ファルネーゼ

一七三二年十月二一日、リスボン

敬愛する父君さまと母君さまへ

父君さまにおかれては下剤服用の必要ありとの由、残念に思いつつ、快方に向かうよう祈ります。神護により私は元気でおります。母君さまが父君さまとともに至福の日々を迎え、吉報をお知らせくださるのをお待ちしております。

こちらでは聖テレジアの祭日激しい暴風雨に襲われました。午前七時頃から十一頃まで荒れました。その前日はよく晴れたため、思いがけぬ異変でした。船舶に多大の損害を与え、陸に押し上げたり、船体を打破して、多くを運航不能にしました。ポルトガルの船はもとより、イギリス、オランダ、フランスの船も被害を受けました。オリーブの果樹園も全滅し、痛ましくも多くの人々が命を失いました。窓際から見詰めると、河流の氾濫によってすべての樹木が水没し、緑地は一変して焦土のごとく映じました。

国王陛下の誕生日にセレナーデを催すので、前日の日曜にその準備をしました。教会の祝賀ミサに臨席し、国王陛下と握手するため、王太子様は夕宵七時にマフラへ赴かれました。晩課と朝課が予定され、今日は夕食後四時間にわたり祈禱します。例年王妃陛下が参詣されるように、私もいまから聖テレジア尼僧院へ出掛け、聖女テレジアの祝祭に参加します。父君さまと王子・王女の方々によろしくお伝えください。

かしこ。②

ヨーロッパ有数の良港リスボンはしばしば荒天に悩み、暴風の被害を受けたことは、気候温暖なポルトガルを推奨

① *Ibid.*, pp.158-159.

② *Ibid.*, pp.108-109.

する地誌『リスボン細叙』にも誌される。この書物によれば、一七二〇年十一月激しい嵐によって船舶百八十艘が破壊された。① マリアナ・ヴィトリアが伝える災害は、記録的な異変として『ガゼッタ・デ・リスボア』でも報じられた。

週報誌『ガゼッタ・デ・リスボア』一七三二年十月三十日号

ポルトガル リスボン発十月二三日

王妃陛下、王太子妃殿下、ペドロ王子様、ならびにフランシスカ王女様におかれては、先週の水曜日聖女テレージャ・ダヴィアの祭日に洗足カルメル会レモディオス教会で祈祷を捧げられた。木曜日同じく王妃陛下は、王太子夫妻およびペドロ王子様とともに、近郊ベンフィツカを散策され、アフォンソ・マヌエル・デ・メネゼスの所領で清遊のひとつきを過ぎされた。金曜日王妃陛下は宮廷の貴顕多数を従えて、イエズス会修練教会に参詣され、そこでの謝恩式に臨席された。日曜日は聖ペドロ・アルカントラの祭日であつて、王妃陛下は王太子妃殿下、ペドロ王子様、フランシスカ王女様とともにアラビドス教会で祈祷を捧げられた。(中略)

十月十五日リスボン一帯は規模でも被害でも記録的な暴風に襲われた。午前六時ころから南風が強くなり、風向きを南東に変えつつ速度を増し、十時頃には激烈となつた。港に停泊する船舶は錨鎖を断たれて浮遊し、あるいはテージョ河畔に乗り上げ、あるいはサンタレンまで風に流された。マストを砕かれた船も、船体を破損した船も、すべて繋ぎ留める必要があつた。数日前アリカンテから到着したセザール号は、免税の特権を得た船荷をすべて喪失し、マスト修理のため船を陸揚げした。無数の大船小舟が沈没し、数多の男女が遭難して、被害の程度はいまだ算定できない。消散し、英国のパケット船もフォルマウスへ帰れないのである。リスボンの住民すべてが、茫然として風の勢いに戦慄する。至るところで瓦が飛び、ここでは家屋が破壊され、かしこでは障壁が崩れた。多数の樹木が引き抜かれ、横転する。ブドウの木をはじめ、種々の植物を突然の豪雨がなぎ倒して枯渇させ、それに続く長期の霧雨が果実をも変質させ、腐らせてしまう。今次の災害はかくも甚大かつ凄惨であつて、後生に想記させるべく、その詳細を述べるには多くの紙面を必要とする。②

マリアナ・ヴィトリアがつぎに伝える災害は一七四五年リベイラ王宮一帯の火災である。この火事はクリスマスの前日王妃閣で発生し、四時間にわたり激しく延焼した。国王ジョアン五世の発病によつて、王妃マリアナ・デ・オステリアは一七四二年より摂政の地位にあり、王太子ジョゼは三一歳。王太子妃マリアナ・ヴィトリアは二七歳の女盛りにして、三人の王女、すなわちマリア十一歳、アリア・アンナ九歳、マリア・フランシスカ・ドロテア六歳の母であつた。この通信は身辺に危険が迫り、王女とともに避難した一文として、大地震の証言である一七五五年の書簡と共通の要素を持つ。

マリアナ・ヴィトリア書簡第二四六

宛先 スペイン王妃イザベル・ファルネーゼ

一七四五年十二月三二日、リスボン

敬愛する母君さまへ

父君さまも母君さまも健やかとお使いを頂き、喜びに堪えません。神護により私も我が子らも無事であることをご謹んでお伝えします。

① Anonime, *Description de la ville de Lisbonne*, Paris, 1730. p.6.

② *Gazeta de Lisboa Occidental*, Num 43. Quinta feira 23. de Outubro de 1732. pp.435-436.

クリスマスの当日ここで火災が発生し、驚愕しましたが、天佑を受けて危害を免れました。早朝の五時半以前の王太子妃分室で燃え始めました。私の居室からは離れていますが、第一王女の居室は火元の控室に近く、いまひとつの部屋を間に挟むのみです。動転した彼女は下着のまま王妃陛下の居室に駆け込みました。王妃陛下の寝台でしばらく休みますが、長居はできません。他の王女ふたりも裸足で下着のまま国王の居室へ逃れました。夜遅く就寝した私は、王太子妃の居室にいて、真つ先に火災と気づきました。王太子さまに知らせると、怖れるに及ばぬとの返答です。様子を確かめに行かれ、すぐに戻って言われるには、屋根が燃えるものの、すぐに消せるとの由。それでも私にはすぐに起床して、慌てずに対処するよう促し、王太子さまはすぐに戻ると出て行かれました。私はルイーズを呼び、金剛石や宝石箱を国王陛下のもとまで運ばせるよう指示しました。国王陛下はまだ横臥しておられ、大変なことに、心配は要らぬと申されます。とにかく非常な難儀をして、居室の金庫すべてを安全な場所に移しました。私たちの居室が延焼を免れた反面、火焰は火元の王妃控室から他の小部屋に移り、王妃楼閣では五つの控室が焼尽しました。王太子妃居室に属するものでは、タピスリ数点を失ったのみです。母君さまに正直に申せば、手元にあった宝石類や貴重品は、ここで初めて入手し、愛好するものばかりで、再度見つけたり、取り寄せるのが困難です。それらを避難させたあとは、かりに居室が焼けたとしても、それほど残念ではありません。

母君さまのいつに変わらぬご配慮に感謝し、王子・王女の方々によりしくお伝えくださるようお願いします。

かしこ。①

一七四五年クリスマスにおけるリベイラ王宮の火災は、数日後『ガゼッタ・デ・リスボア』の項目ポルトガルで報じられた。同誌によれば、この火事は相当の規模であつたらしく、王権によつて緊急の対策が指令され、王宮近隣の王立兵器廠でも消防の体制が組まれた。この記事でとくに注目されるのは、聖職者や貴族層による防災活動を、王太子ジョゼをはじめ王族一同が指揮したことである。

週報誌『ガゼッタ・デ・リスボア』一七四五年十二月二八日号

王妃楼閣から発した火災は、十二月二四日夕刻に鎮まった模様である。火の手は天井の材木部分から発生し、翌朝の四時頃には屋上の煉瓦も燃え始めた。激烈な火勢に消火の手立てもなく、巨大な堂宇六棟がをはじめ、幾多の建物が焼尽した。火事場からかなり離れた地域、総大司教教会に通じるガレー船本部や王立兵器廠まで伸びるリビエラ・ダス・ナオス河畔にも、消防活動が命じられた。こうした応急の対策を王太子殿下はじめ王族の方々が推進され、貴族階級の全員と総大司教教会の高位聖職者が宮廷に集結した。フランシスコ修道会、洗足アオグスチヌス会、イエズス会、オラトリオ会、トリニテ会に属する修道士等が、高位聖職者や指導者層の指示によつて消防活動に献身し、各修道院に備わる運搬車で給水した。彼らの行為は熱意と成果において卓越し、感嘆すべきは死者を皆無にしたことである。彼らの義勇によつて国民が危急から救われた。②

① *Cartas da Rainha D. Mariana Vitória*. pp.252-253.

② *Gazeta de Lisboa*, Num 52. Terça feira 28. de Dezembro de 1745. pp.10401041.

第三節 震災直後のベレン宮廷とブラガンサ王家

ベレン離宮の骨格は地震に耐えたものの、内部の破壊が甚だしいため、一キロ北のアジューダ緑地に国王一家は避難した。用意された宮廷馬車のなかでその日は眠れぬ一夜を過ごし、食物の用意も乏しいため応急のスープ類だけで耐えた。例年六月から十月まで宮廷が長期にわたりベレンで営まれるので、国務尚書など王権の要人や国王一家の侍従もおおくはアジューダ教区に仮寓したと思われる。大地震の直後にアロルマ侯爵など長老の貴族も駆けつけ、アジューダ緑地には仮設御所が急造された。ポルトガル駐在の英国大使アブラム・カストレスは、リスボン郊外の公邸に被災者を受け入れる一方、十一月五日アジューダの仮設御所に参上し、国王一家を慰藉した。英国宮廷に届いた同月五日付公文書の一節を引用する。

英国大使アブラム・カストレス 一七五五年十一月五日付公用至急便

・・・震災後最初の数日は街道が遮断され、ようやく昨日ド・ラ・カルメット殿に伴われ、ベレンにあられるポルトガル国王と王室の一家と光栄にも拝謁致しました。どの王宮も避難には適さず、仮設御所で過ごされています。このたび王室の被害は甚大であり、王都も壊滅したにもかかわらず、国王は予期したよりも平静に対応されました。そして、国王とご親族の存命を神慮に感謝すること、また私たちの無事が喜びに堪えぬことなどを話されました。私たちの慰藉に王妃をはじめ若い王女の方々も、感謝の意を伝言されました。仮設御所で寝起きし、晴着の用意もないので、いまは簡略な挨拶に止めたいとの由です。・・・①

壊滅したりベイラ王宮からポルトガル宮廷はベレンの仮設御所へ移動し、地震発生の当日から国務尚書カルヴァリヨの主導により王権の危機管理と救援活動が開始される。以後これなるベレン宮廷を基点として大震災に対処する勅令、布告、通達が相継いで発布され、一七五八年六月末日までにその総数は二百余件に及ぶ。その間政策推進の首脳部はアジューダ緑地に仮寓し、国王一家の仮設御所で窮乏生活を続けた。

十一月十一日王妃マリアナ・ヴィトリアは、スペイン宮廷宛に再度震災の状況を知らせる。当地では微弱ながら余震が頻発して、国王一家はなお仮設御所で暮らし、平常に戻る見通しもない、と。なお、この書簡では、マドリッドにおける地震波及の際スペイン王家が無事であったことが祝福されている。次週十八日の書簡でも余震の報告がなされ、恐怖が募るあまり、僅かな揺れでもみな震えあがると彼女は伝える。十一月下旬から年末にかけて首都復興の事業が始動するなかで、王宮の再建も論議された。モンテリロ著『評伝 ジョゼ一世』からこの時期における王妃書簡の抜粋を訳出する。

マリアナ・ヴィトリア 一七五五年十二月付スペイン宮廷宛書簡

地震がいまも繰り返すので、市街へは戻れません。身を寄せるベレンの被害が軽少であり、神に讃美を捧げますが、すべてに補修を要します。・・・母君さまからのお尋ねに答えるとなれば、例年避暑に来るリヨン郊外、ベレン離宮の近くに木造のささやかな宮殿を建てるのが、国王陛下のご意向のようです。・・・破壊を免れたマフラの宮殿へ陛下が転居される、と噂する人々もいます。ありえない、と私が思う理由は、現状のままリスボンから遠ざかるのは

① Letter from Abtham Castres, Envoy Extraordinary to the King of Portugal of 6 novembre 1755. The national

得策でないこと、またマフラほど壮大で高層の建築はかえって危ないことです。したがって、なお天幕の下に長居するほうを選びますが、寒さで震える季節となりました。①

アジューダ緑地の仮設御所に設けられたベレン宮廷では、被災者の救出や生活物資の供給が自由都市リスボン参事会やポルトガル国王軍など巨大組織に指令され、これに率先してジョゼ一世はじめ王族も救援活動に尽力した。王妃自身も避難の直後から食物や衣類の調達に努めたとされる。長文の古文書『ポルトガル艱苦と混迷―大地震一七五五年』には、国王一家の罹災状況と被災者救援が比較的詳しくかたられる。聖職者の執筆と思われるこの証言は、ながく死蔵され、二〇一〇年リスボン市庁史料室によりようやく印刷された。

執筆者不詳 『ポルトガル艱苦と混迷―大地震一七五五年』

〔第一九六項〕同じく危機に襲われた王妃陛下と王女諸殿下は国王陛下とともに緑地へ避難され、嚴重な警戒のもとに宮廷馬車を出動させ、終夜車上で過された。大地は緩慢な揺れをなお繰り返す。食物の用意も乏しいため、当日と当夜はスープだけで凌がれた。

〔第一九七項〕国王陛下がまず發揮された寛仁な博愛的偉業は、地震の当夜あるいは翌日ベレンの被災者すべてに、食物を供するよう命令されたことである。これを拜して彼らの飢えを満たせず、群がる膨大な避難民のため、余裕のある他の諸地域から救援を求め、病める者にも健やかな者にも、子どもにも成人にも、貴族にも商人にも食物を支給したのである。

〔第一九八項〕国王陛下が果たされた他の功業も傑出したものである。大勢の人々が財産を喪失し、目下生計の方途を持たぬこと、またさまざまな治療、衰弱や高齢で衰えた人を救ったり、種々の疾患や女性特有の病を治すことも放置されることを、陛下は明察された。そのため河岸のベレン離宮とデバイシャ宮において、従来乗馬を訓練した庭園や馬場に、数多の傷病者を收容し、長期にわたり適切な治療を施すよう命じられた。②

また、國務尚書カルヴァリオの依嘱により緊急政策の膨大な公文書を編纂したフレイレは、それらの主要な内容を解説した「緊急政策解題」において、被災者に向けた王妃・王女の看護活動をとくに称讃している。

フレイレ「緊急政策解題」項目第三 負傷者と病人の治療への対処

かかる震災の日々において幾多の救援活動が推進された。すべてが国王陛下の博愛的な御心と内閣の稀有な熱意によつて実現された。なかでも第一の緊急措置として、罹災地で神の恵みにより死を免れた負傷者と病人が救出され、迅速に治療を施された。死と飢えと病が一挙に迫り、対応を猶予できなかった。〔中略〕

偉大にして敬虔な国王陛下のご高配のもとで、外科医と看護婦によつて敏速な治療もなされた。そのほか君主の博愛に導かれ、さまざまな方々が看護に参加し、多数の人々が命を救われた。王妃陛下もまた王女諸殿下とともに救援活動を希望された。(前例のないことであるが)みずからの御手で布地拵げ、薬物を調べ、患者を支えられる。聖なる王女の伝記のなかに同様な事蹟が綴られるのを讀まれ、自己の反省や故事の教訓から尽力されたのである。その影響は今日もなお続いている。類稀な模範であつて、すぐさま宮廷の女官一同がそれに倣い、競うごとくこうした崇

① Rainha D. Mariana Vitória, Carta a sua mãe, a rainha Isabel de Espanha, Dezembro de 1755. in Monteiro, *op.cit.*, p.106.

② *Portugal Afflito e Conturbado pello terramoto do anno de 1755*. Lisboa, 2015. pp.46-47.

高な奉仕に没入した。①

地震発生のときベレン離宮に居合わせた王族は、国王ジョゼ一世と王妃マリアナ・ヴィトリアのほか四人の王女、すなわち二一歳の長女マリア、一九歳の次女マリア・アンナ、十六歳の三女のマリア・フランシスカ・ドロテイア、それに九歳の四女マリア・フランシスカ・ベネディタである。被災の衝撃をとりわけ深刻に受けたのは、第一王女マリアであつて、宮廷馬車と仮設御所で苦悶の連夜を続けたとされる。一七五二年十二月ポルトガル宮廷は彼女十八歳の誕生日を祝福し、外国使節もこれに祝賀を寄せた。容姿恵まれたこの第一王女は、イエスズ会士による宗教教育を受けるととも、イタリア人音楽家ダヴィッド・ペレズから声楽の指導をうけ、母后マリアナ・ヴィットリアと同じく、フランス語とラテン語を学んだ。情愛深く多感であるとともに、マリアは内面的で内気で鬱病の気質を秘め、十九歳のとき重病から奇蹟的に回復したあとは、とくに信仰を深めていた。やがて一七七七年国王ジョゼ一世の逝去によつて、彼女はポルトガル最初の女王、マリア一世として即位する。カルヴァリヨによる壮大な祖国再興の偉業と底流にある峻厳な弾圧体制を二十余年見詰めた彼女は、ただちにこの独裁者に解任と追放を決然と言い渡した。しかし、フランスにおける王妃マリー・アントワネット処刑の頃から精神疾患に冒され、さらにナポレオンの侵攻とリオ・デ・ジャネイロへの遷都など悲痛な運命に曝される。マリア一世の病状としては地獄の業火に襲われる連夜の幻影も記録され、この心疾の遠因には、大地震の痛苦な体験が含まれるであろう。②

① Amador Patricio de Lisboa, *Memorias das principaes Providencias, que se derão no terremoto*, Lisboa, 1758. pp.9-10.

② Jenifer Roberts, *The Madness of Queen Maris, the Remarkable Life of Maria I of Portugal*, Chippenham, 2003. pp.15-16, 21-24, 57-58, 112-114, 121.

